

創刊によせて

編集長 行岡久美子

行岡病院は昭和九年に創立されました。早いもので今年で六十一年、人生で言う還暦にあたり新たな出発の起点が望まれるところです。

思えば日本はこの六十一年の間戦後の復興をはじめ高度成長、情報化時代へと社会は大きく変化してまいりました。

先月インターネットなる映画を見ましたが地球規模のネットワークとワイドでスピーディーな情報力にはただただ驚くばかりでした。米国ではすでにパソコン通信などの情報通信機器を活用した在宅勤務

者が九百人を越すとまで言われております。

二十一世紀の時代に向けて地域や職場のネットワーク、スビーディな情報、そして一人一人のコミュニケーションを持つことが必要ではないでしょうか。

この通信が何かのお役にたてればと願っております。

通信の名前を、ひこばえ(薬と名付けました。

「薬」とは大きな木の切り株から新しい芽が出ることです。ひこばえが大きな夢を咲かせることを切望しながら創刊の挨拶と致します。

年二回発行の予定をしております。創刊にあたり御協力をいただきました諸先生方編

集部員の皆様に厚く御礼申し上げます。

理事長 行岡正雄

「ひこばえ」誕生おめでとうございます。この新聞が未永く続いていくことを願っております。さて紙面をお借りしまして今後の行岡病院の方針の一つを述べさせていただきます。

「生命の医学から幸せの医学へ」学生時代に読んだ本の中で感銘を受けた言葉の一つです。これは最近言われたことです。これは最近言われたことです。QOL (Quality of life) に近いものと考えられます。

リウマチ友の会の機関誌「流」の中で日本整形外科学会理事長の小川亮先生は「患者のために医者があるのであって、医者のために患者があるのではない」と、われだした恩師の言葉を引用されておられました。さらにご自身恩師の言葉を一歩進められて「病気のためにだけに医者があるのではなくて、病む人のために医者がある」という理念でもって臨床に取り組みされていると書いておられます。

私も今後、「幸せの医学」を実践出来るような病院作りを心がけて行きたいと考えている次第です。皆様の御協力をお願い致します。

副院長 上埜帝一

高齢化社会について

日本の四季は楽しい。春夏



秋冬、種々様々の移り変わりが、人の目を心を刺激する。これが日本人の感性を高め情緒豊かな教養文化の発展に寄与している所は大きい。なのに、私達の職場環境も含めて何故か現代日本の社会はしつくり行かない。高齢化社会に進行して行く中、財政を含めた行政改革が叫ばれる間もなくバブル崩壊、きびしい経済的混乱の中に医療問題も世間脚光を浴びだした。

高齢化社会における問題とは、生産性の無い人口が増えて経済を圧迫し、更に医療界の赤字を増大させる事とも考えられている。しかし老人に対する医療費(優遇策)を削減しようと言う政府の口は、経済的には仕方の無い事かも知れないが根本的医療対策としては感心出来ない。「財政難に直面して医療も金の切れ目

五年勤続者 二十一名											
行岡	中島	橋口	柏田	藤原	浜	藤原	上杉	長谷部	和田	荒木	伊上
和彦	ひとみ	久美子	友子	慎吾	義輝	正昭	美	秀子	ツヤ子	小百美	美由紀
古田	穴見	月本	石間	林真	白倉	桶本	益永	前谷	松本	高原	高
江	由子	美	子	美	枝	美	紀	博美	さよみ	明美	美

ハ木: 単なるニュースではなく職員のひこばえ(パイプ役)にしていきたいと思います。

吉田: 行岡病院をより深く知り働きたいのある職場を作って行きましょう。

宇都宮: 明るく活気のある病院めざしてがんばります。

福永: 創刊号の編集部に加えていただき光栄です。

行岡久美子: ホリスティック医学の理想主義者です。

高木: いろいろの情報お待ちしております。

荒尾・曾根: 自分自身もプラスになる情報もたくさんありますし、職員の方にも「良い情報を得た」と思える広報にしていけたらと思います。

次期広報部員募集しております。

TEL内線368 荒尾・曾根まで

Ope Room 阪上: 全職員が公報配布を楽しみに待てる内容を届けたいと思います。

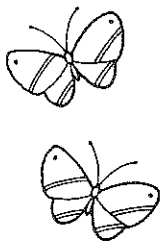
告知板		四月一日	新規採用数
准看護婦	八名		
助手	十二名		
薬局	二名		
歯科	一名		
理学療法科	五名		
栄養管理室	二名		
事務	八名		
合計	三十八名		
編集後記		四月一日	入職式
		四月	健康診断
		六月	消防訓練
		六月	オーストラリア海外研修

創刊にあたり広報部員は独自でさめさせて頂きました。初めての紙面づくりで四苦八苦しましたがこの通信が何かのお役に立てればいいと思います。

が命の切れ目になる。」という言葉が聞こえる様で物悲しい。さて脳卒中や脳機能障害の進行により惚けた患者さんのリハビリに効果があるのは、その人の一番好んだ事象や歌等を繰り返し見聞させる事らしい。豊かな日本の四季 健康人の感性を高める様に、こういう患者さん達のリハビリにも心に届く刺激が必要という訳です。この様な役目を果たすには心の余裕が必要であります。仕事に追われ雑事雑用に使われる人達も今一度我が身を見つめ心に余裕を持つ必要があります。優しさを生み出す心の余裕であります。さて、行岡病院にも主に高齢者を中心とした療養型病棟が出来来るそうですが、患者さんが楽しくリハビリできるのは勿論職員の方々も積極的に楽しく働ける病棟が出来来る事を願って止みません。

副院長 行岡和彦

病院に新聞が出来ると聞いて、これは大変良いことだと思いました。現在、病院には約四〇〇名の職員がいますので、とすれば横の連絡が手薄になって情報不足におちいることがあると思うからです。何気ない話題からでも、はっとするような発見があるかもしれない。また他の部署の情報を知って今まで知らなかった一面に気づき、お互いの理解が深まるようなことがあるかもしれません。編集者の方々の御苦労は大変だと思いますが、ぜひ末長く続けて頂きたいと思います。



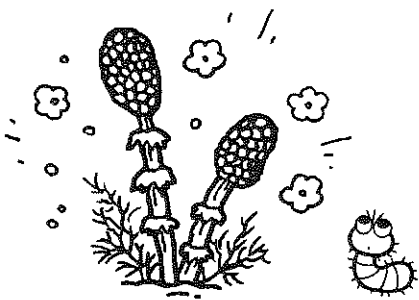
看護部長 桂 ミカ

この度 行岡病院新聞創刊号発行にあたり病院全職員の方々との一層強い心と心を結び絆ができる事を期待いたします。さて、医療、看護を含めて介護、福祉の枠組が大きく変わろうとしています。それに伴い看護職に求められるレベルや役割はますます重要な性を担い、一大転換期を迎えつつあります。新看護体系の制度、付き添い廃止等の新時代への重要な課題は、私達病院側は何よりも患者様のニーズに合わせて満足して頂けるサービスを提供する事です。そこで、看護者には適切な判断力で、その時の問題解決能力、応用能力、そして強力なリーダーシップが今以上に求められます。従って看護婦は今までより一層の努力、研

鑽が期待されます。また、地域の人々の健康を守る行岡病院の重要な役割を果たすには、新制度がどんなに変わろうと、そのマンパワーを活かす組織と人づくりを確実にすれば、地域社会に貢献できるのではないのでしょうか。病院全職員が二十一世紀に向かって、院長行岡正雄先生のご指導の下で、小子、高齢化社会をのりこえる基盤を強化すると共に行岡病院の益々の発展と職員の皆様の更なる幸せを祈念いたします。

事務長 川原 泰

行岡病院ができてから六十余年、このたび院内新聞「ひこばえ」が発刊されることは大変喜ばしいことと思います。医療をとりまく環境は高齢化社会の進展とともに「医療」



中心から「福祉」へと大きな変革を余儀なくされております。その一つとして、六十五歳以上を給付対象とした「公的介護保険」の導入が検討されているところです。私どもとしても、このような変革に対応していくとともに地域に根ざした「患者さんにやさしい病院」作りに心がけていかなければならないものと考えております。

柔道整復師 八木良憲

「ルーツ」

創立者、故、行岡忠雄先生（行岡正雄先生の祖父）は明治三十四年二月一八日に生まれ阪大の前身である大阪医科大学を卒業後、大阪医科大学ヘルテル外科教室・東北大外科教室・高槻医専講師を経てこの地にすでに前年開校された日本で最初の柔道整復師養成学校「大阪接骨学校」の付属病院として昭和九年十月「行岡外科病院」が開院され今年で「行岡病院」は六十一歳を迎えます。

薬局長 吉田和子

月曜日に微笑を

仕事や授業で又、新たに始まる月曜の朝、お互いにほんのちよつと努力して、ほほえ

みを交わそうではありませんか。それだけで、あなたの周

辺はほんのちよつと明るくなると思いますよ。病院内ですれ違う時、職員どうし必ず「おはようございます。」と挨拶はしていますが、その表情は、ほほえみをもったものではなく、むしろ条件反射的に声を出してはいませんか？しかし、自らほほえみながら声を出していると、自分自身憂うつな気分がとれて、なんとなく明るい気分になることができます。忙しい時間帯にあれこれ無理をいつてくる患者さんに対して仕事とはわかっていても、つい不親切な対応をしてしまっていないですか？そんな時でもほほえみを交そうという気持ちがあれば、ほほえむことはできないまでも不親切な対応をすることはないのではないかと思えます。

イヤな表情のままで過ごしても、ほほえみをもって過ごしても、同じ時間なのだから、

ほほえむことのできる気持ちをもっていられたら、素晴らしいなと思います。みなさんも一度ためしてみませんか。

脳外科 藤原正昭

「医療最前線」

ホリスティック医学とは？ホリスティック医学は未だ定義が明らかになっていないが、もし一言で現すならば、人間を肉体と精神の両方を持った、「全体」としてとらえようとする医学といえよう。「健全な精神は健全な肉体に宿る」と古来からいわれ、肉体と精神とは不可分のものであることは自明のことである。にもかかわらず、現代医学は

過度に専門 細分化が進み、

病気を肉体の一部の故障としてみがちとなっている。その結果、病気を診て患者を診ず、といった非難があげせられて

いる。こうしたあまりに、分析的になりすぎたことへの反省から、人間をもっと全体としてとらえようという立場から生まれたのがホリスティック医学である。東洋医学ともあい通ずるところもあるが、その内容は薬物療法、自然食、マッサージ、瞑想、音楽療法、温泉療法、多岐にわたっている。

行岡久美子

「在宅が実っています」

昨年の四月より当院でも高齢者を対象とした在宅リハビリをスタートし一年が過ぎました。二、三人でスタートし

た患者さんの数も月を追う毎に増し、いかにニーズが多いかを驚いております。今年の一月からは内科の細谷先生を迎え一段とグレードアップ、そして看護部門の在宅訪問の拡大へと又、充分なサービスが患者さんに提供が出来る様に頑張っております。

二月十九日永年勤続の表彰式がおこなわれました。

- | | | | | | |
|--------|-------|--------|-------|-------|--------|
| 二十年勤続者 | 西口 澄男 | 阪井 豊明 | 胡中 貢 | 迫田 昭 | 村井 リエ子 |
| 十五年勤続者 | 三名 | 塩崎 まゆみ | 土谷 輝美 | 上埜 帝一 | |
| 十年勤続者 | 八名 | | | | |